

読売新聞 2016年9月7日 12版 文化欄に、「遺跡が語る震災1」が掲載され、その切抜を再掲します。興味深いテーマであり、5回シリーズがどのように組立てられているのか、楽しみです。

地震の痕跡 生々しい証拠



発掘調査で確認された小野原A遺跡の地割れ (熊本県教育委員会提供)

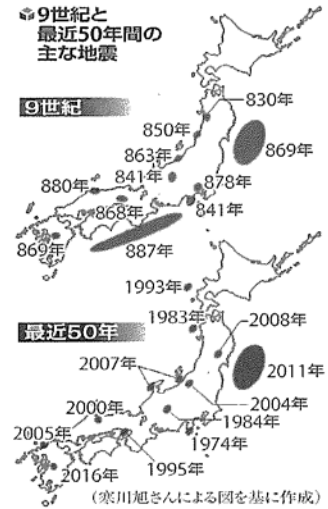


4月の熊本地震で、阿蘇神社の構門(重要文化財)が全壊するなど大きな被害が出た熊本県阿蘇市。8月上旬に訪ねると、道路や田畑の至る所に地割れが残り、爪痕の大きさを感ぜさせた。今回と似た地割れを引き起こした地震が、約2000年前に起きていたことを物語る遺跡が市内にあった。小野原A遺跡は、赤色顔料のベンガラや鉄製品、ガラスが出土し、弥生時代後期の有力な集

遺跡が語る震災

歴史上、日本列島を襲った地震の痕跡が、遺跡の発掘調査でしばしば見つかっている。現代にどんな教訓を伝えているのか、5回にわたって探る。(文化部 清岡央)

9世紀と最近50年間の主な地震



9世紀と最近数十年に類似点

落跡だったと考えられている。遊水池の建設に伴って県教委が行った発掘で2002年、地震による大規模な断層が約30層にわたって確認された。水平方向のずれは約20m、垂直方向のずれは約120cmにも及んだ。地層の前後関係から地震は約2000年前に起きたと考えられている。産業技術総合研究所の寒川旭・名誉リサーチャー(地震考古学)は、「阿蘇山の周辺は小さな活断層が数多く走っている。遺跡で発見された地割れは、相当な規模の地震がいつ起きてもおかしくない」と警告する。

熊本を襲った地震の歴史で、寒川さんが特に注目しているのが平安時代の歴史書「日本三代実録」の貞観11年(869年)の記述だ。時の清和天皇が伊勢神宮に告げた文として「肥後国(熊本県)で地震風水害があった。寺宅(家屋)がごとごとく倒れ、顛り、人民の多くが流亡した」と記されている。寒川さんは、「最近数十年の地震活動とよく似ているのが9世紀」という。9世紀の日本では、大地震が続き、律令国家を揺るがせた。800年出羽北部秋田県、841年信濃(長野県)・伊豆(静岡県)、850年出羽南部(山形

県)、868年播磨(兵庫県)、869年には、東北地方を大津波が襲った貞観地震が発生した。そして、887年、南海トラフ周辺で仁和地震が起きている。9世紀と、現代の最近50年の主な地震の発生場所を地図で見比べると、傾向がよく似ていることがわかる。寒川さんは「熊本地震の後には、南海トラフの巨大地震が控えている。南海トラフ地震が、近い将来に起きる前提で備えが必要だ」と話す。

歴史上の地震のすべてが、歴史書や古文書などの文献に記録されているわけではない。記録があっても簡単な記述も多い。だからこそ、小野原A遺跡のように発掘で見つかる地震の痕跡は、災害の生々しい証拠として貴重な。ただ、考古学の中で災害が注目されるようになったのは、比較的最近のこと。寒川さんが「地震考古学」を提唱したのは1988年だ。今年3月、兵庫県西宮市で開かれた各地の研究者や埋蔵文化財担当者を集める研究会は「災害と復興の考古学」をテーマに掲げた。各地での実際の発掘経験に基づいて狙いだ。その報告では、地割れを掘りながら、自然現象が人間の痕跡が判断が付かなかった「発掘が終わるまで津波堆積物とわからなかった」との声も上がった。実際に遺跡を掘る担当者が、地震痕跡をそれと気づかなければ、遺跡からの教訓は見逃されてしまう。日本列島が地震の活動期に入ったと言われる今が、意識を高めるべき時だ。(今回は、14日掲載予定)

記事の中で注目すべきは、産総研・名誉リサーチャー 寒川旭さんの発見「9世紀と、現代の最近50年の主な地震の発生場所を地図で比べると、傾向がよく似ている」というご指摘であります。科学には法則性、規則性があり、地震発生には応力解放の順番らしきものがあるという風に捉え、時系列に沿って地震発生場所をなぞってみると、ENE-WSW 軸と N-S or NNE-SSW 軸が卓越して見え、振子のように振れています。二つの軸は、西日本及び東日本、それぞれの地形の軸方向に重なっており、これは当然の帰結なのでしょうか。皆さんも作業仮説を立てて見ませんか。(文責 アーキジオ春秋)